

東京慈恵会医科大学医学部医学科

医学教育分野別評価 2017 年次報告書

2018 年 9 月提出

**医学教育分野別評価 東京慈恵会医科大学医学部医学科 年次報告書
2017年度**

評価受審年度 2014（平成 26）年

（2018 年 9 月提出）

1. 使命と教育成果

項番・題目	1.1 使命
水準・判定	質的向上のための水準 部分的適合
改善のための示唆	
国際的な保健・健康維持に関する事項を教育の使命に包含することが望まれる。	
改善状況	
国際的な保険・健康保持に関する事項を教育の使命に包含することが望まれるとの示唆に対して、国際交流センターを通して学内外へその周知を図った。国際交流センターでは海外提携校の増数に努め、新たにシンガポール大学と包括的契約を締結した。また、Mayo Clinic とのジョイントシンポジウムの開催、海外留学の支援セミナー、native speaker による OSCE、海外実習成果報告会など、諸種のイベントの定期開催を実施している。また、毎年 120 名を越す海外留学生を受け入れ、毎週月曜に昼食を兼ねて交流会を持つなど、学生に海外医療事情への関心を高める企画をし、海外での臨床実習を希望する学生は年々増加するに至っている。	
今後の計画	
海外提携校との関係を充実させ、国際交流の質的向上を計画している。国際交流センターの機能拡充を基軸として、国際的な保健・健康保持に関する本学の教育内容を具体化し、学内にその目的へのコンセンサスをえて、使命としての認識を図る。	
改善状況を示す根拠資料	
資料 1-1. 国際交流センター年報平成 28 年度	

項番・題目	1.4 教育成果
水準・判定	基本的水準 部分的適合
改善のための助言	
教育成果は教育期間終了時に実証されることが求められる実践力（コンピテンシー）であり、それに適したタイトル及び表現とすべきである。	
改善状況	
卒業達成指針は定められていたが、教育成果を測定可能なコンピテンシーとして表現することはできておらず、アウトカムをどの程度獲得できたかをみるためのパフォー	

<p>マンス評価の導入も不十分であった。これに対して、2015 年の新カリキュラムにおけるクリニカルクラークシップのコンピテンシーを医学科達成指針に合わせて策定し、実習用シラバスに記載した（改善報告書）。2017年7月、新カリキュラム修了生に対して、2日間に亘って100名以上の臨床系教員の参加により、修了認定のための Post-Clinical Clerkship OSCE (PCC-OSCE) を実施した。その後、OSCE の評価と実習全体の評価を突合し、コンピテンシー測定法としての妥当性を検証した。結果は、概ね妥当性のあるものとの感触をえた。</p>
<p>今後の計画</p>
<p>本年度から共用試験機構の PCC-OSC トライアルに参加、本学の定めるコンピテンシーとの整合性を検証する予定である。</p>
<p>改善状況を示す根拠資料</p>
<p>資料1-2. PCC-OSCE実施要項</p>

項番・題目	1.4 教育成果
水準・判定	質的向上のための水準 部分的適合
改善のための示唆	
<p>卒後研修修了時のアウトカムを明示し、卒前教育との連携を図るプログラムの構築が望まれる。</p>	
現在の状況	
<p>卒後研修修了時のアウトカムを明示し、卒前教育との連携を図るプログラムの構築が望まれるとの指摘を受けた。クリニカルクラークシップでは、学生は医療チームの中で自主的に学ぶ学習形態であることをガイドブックに明記し、学生は研修医に求められている研修内容を目の当りにすることとなった（改善報告書）。一方、本学本院研修医は学外出身が半数を占め、卒前・卒後のアウトカムの整合性がとりにくいことから、採用試験に OSCE を取り入れ、一定以上の能力を有する学生を採用することとした（改善報告書）。その成果は実習終了時の報告会で検討したが、改善のための示唆は今後の継続検討課題である。また、研修指導医講習会でも、クリニカルクラークシップを話題としてとりあげた。</p>	
今後の計画	
<p>これから本格的に指導する専門医プログラムを見据え、卒前卒後の教育の連携について、検討を重ねたい。</p>	
現在の状況を示す根拠資料	
<p>資料1-3. 平成30年度クリクラ実習報告会次第 資料1-4. 研修指導医講習会次第（平成29年度、30年度）</p>	

2. 教育プログラム

項番・題目	2.1 カリキュラムモデルと教育方法
水準・判定	基本的水準 適合
改善のための助言	
なし	
改善状況	
<p>アウトカム基盤型カリキュラムを構築するために、卒業時コンピテンシーを定め、そこからマイルストーンを設定して各ユニットの到達目標を定めていくために、平成 29 年度よりカリキュラム委員会の下部組織として、マイルストーン・ワーキンググループを設置して検討を行っている（資料 2-1）。平成 30 年度までに医学科達成指針に基づく卒業時コンピテンシーを定め、医学科達成指針との整合性を確認した（資料 2-2）。</p> <p>平成 28 年度改訂医学教育モデル・コアカリキュラムと現行のコース・ユニット制カリキュラムとの整合性を確認するため、次年度シラバスに各ユニット毎の教育目標における医学教育モデル・コアカリキュラムの該当項目の記載を行なった（資料 2-2）。</p>	
今後の計画	
<p>卒業時コンピテンシーに基づきマイルストーンを設定する。その後、各ユニット責任者にアンケート調査を行い、各ユニットの教育内容とマイルストーンとの整合性を確認し、整合性が十分でないユニットにおいては教育目標を修正し、次年度カリキュラムに反映させる予定である。</p> <p>平成 28 年度改訂医学教育モデル・コアカリキュラムと現行のコース・ユニット制カリキュラムとの整合性に関して、次年度シラバスの記載内容に基づき調査を行う。</p>	
改善状況を示す根拠資料	
資料 2-1 平成 29 年度マイルストーン WG メモ	
資料 2-2 卒業時コンピテンス・マイルストーン（案）	
資料 2-3 平成 29 年度第 8 回カリキュラム委員会記録（抜粋）	

項番・題目	2.2 科学的方法
水準・判定	基本的水準 部分的適合
改善のための助言	
<ul style="list-style-type: none"> 臨床実習のなかで、学生が EBM に基づいた診療活動を行えるような教育、指導を実践するべきである。 	
改善状況	
<p>臨床実習での EBM 教育の充実を図るために、平成 29 年 11 月 18 日に「FD 医学教育者のためのワークショップ：臨床実習現場における EBM 指導のための教員養成」を実</p>	

<p>施した。外部講師として東京北医療センター総合診療科の南郷栄秀先生を招き、現場の臨床実習指導医 17 名を対象にミニレクチャーとグループワークを行ない、臨床実習での EBM の手法に基づく問題解決を学生に実践させる手法について学ぶ機会となった。</p>
<p>今後の計画</p> <p>次年度以降も年に 1 回、「臨床実習現場における EBM 指導のための教員養成」の FD を開催する予定である。</p>
<p>改善状況を示す根拠資料</p> <p>資料 2-4 平成 29 年度第 7 回カリキュラム委員会記録抜粋</p> <p>資料 2-5 FD「医学教育者のためのワークショップ：臨床実習現場における EBM 指導のための教員養成」の概要</p> <p>資料 2-6 FD「医学教育者のためのワークショップ：臨床実習現場における EBM 指導のための教員養成」の参加者一覧</p>

項番・題目	2.5 臨床医学と技能
水準・判定	基本的水準 適合
改善のための助言	
なし	
改善状況	
<p>卒業時の臨床能力評価を行うために、2017 年 7 月 28～29 日、教員 90 名程と職員 40 名程の協力の下、診療参加型臨床実習終了後の 6 年生に対して PostCC-OSCE を 12 ステーションで実施した（資料 2-7）。これに先立ち 6 月 24 日には FD「医学教育者のためのワークショップ：PostCC-OSCE 評価者トレーニング」を実施している（資料 2-7）。</p>	
今後の計画	
<p>PostCC-OSCE 実施後、協力者の負担軽減など運営に関する様々な反省点があり、次年度の PostCC-OSCE 実施に向けてさらにブラッシュアップしていく予定である。また次年度はトライアルとして共用試験実施評価機構の課題を取り入れる予定である（資料 2-8）。</p>	
改善状況を示す根拠資料	
<p>資料 2-7 FD「医学教育者のためのワークショップ：PostCC-OSCE 評価者トレーニング」の概要</p> <p>資料 2-8 FD「医学教育者のためのワークショップ：PostCC-OSCE 評価者トレーニング」参加者一覧</p>	

3. 学生評価

項番・題目	3.1 評価方法
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善状況	
必要に合わせて新しい評価法を導入すべきである。	
改善状況	
<p>医学卒業総括試験の改善</p> <p>本学では、平成 20 年度の卒業試験の改革以来、基礎医学から臨床医学・社会医学に至る範囲の毎回 500～540 題の MCQ 試験（医学卒業総括試験）を 3 回にわたり実施してきた。一定レベル以上得点した場合、次回以降の受験を免除して、各自の自主的な学修を促し、再度、臨床実習に参加することも可能とした。また、卒業時点における認知領域の最低レベルの能力の向上を図るため、卒業試験の合格基準を、62.5%（平成 20 年度）から 65% とし（平成 22 年度）、さらに 68%（平成 27 年度）に徐々に引き上げてきた。その結果、2 回目までに合格基準に達する学生数は次第に増加し、3 回目受験者は減少してきた（根拠資料参考）。また、卒業試験成績の平均点は緩やかに上昇する傾向が認められた。これらの結果をふまえて、今年度（平成 29 年度）より、試験回数を 3 回から 2 回へ削減することとした。これにより、卒業時点における認知領域の能力評価に要する時間と負担を軽減され、卒業時 OSCE（post CC OSCE）における技能評価等に要する期間を確保することが可能となった。将来的には参加型臨床実習の履修期間や選択の柔軟性を図ることが可能になると考えられる。</p>	
今後の計画	
<p>これまでの卒業試験においては、一般問題と臨床実地問題を約 50% ずつ出題してきたが、次年度においては、その比率を再検討し、Taxonomy III の臨床実地問題の比率を増加することにより、問題解決能力の向上を図ることを計画している。また、各科目の出題数比率についても見直しを図る予定である。</p> <p>一方、共用試験 CBT については、新基準（$\theta \geq 43$）導入時（H25）、および新カリキュラム導入時（H27）など、大きなイベントの際に一時的に成績の向上がみられたが、その後、次第に平均スコアが低下するという現象が認められた。また、平均スコアのみならず、上位スコア（6 段階評価の 6）を得る人数の減少もみられた。この原因としては、1) 現行の CBT 合格基準が低く設定されており（IRT359）、再試験者数が著しく減少していること、および 2) 他大学において CBT 合格基準の引き上げが行われていることなどが考えられる。実際に CBT 本試験で合格基準に満たなかった学生のフィードバックの際、学生の反省点として、部活動などによる明らかな準備不足、勉強不足などが挙げられた。ごく少数の精神的問題を抱える学生を除けば、再試験においては、ほとんどの学生が 6 段階評価の 3 以上に到達している。初期研修マッチング時に CBT 成績の提示が求められる研修先があることを考慮すると、卒業試験と同様に合格基準の引き上げが必要と考えられ、次年度において妥当な合格基準を検討した上で、次々年度において CBT 合格基準の引き上げを計画している。</p>	

<p>新カリキュラム導入以来、4年次前期のコース臨床医学Ⅰの評価を共用試験（CBT および OSCE）に一元化し、これと病理学総論試験に合格していることを全科型臨床実習への進級要件としてきた。しかしながら、臨床実習参加初期における学力不足と4年次前期の臨床医学導入講義（コース臨床医学Ⅰ）への出席率の低下が懸案事項とされてきた。このため、次年度以降において、臨床医学Ⅰ総合試験の導入を検討している。</p>
<p>改善状況を示す根拠資料 なし</p>

4. 学生

項番・題目	4.3 学生のカウンセリングと支援
水準・判定	質的向上のため水準 適合
改善のための示唆	
なし	
改善状況	
<p>2018 年度新入学生の入学当初に行うスタートアップ研修を西新橋校地での研修として計画した。このことにより、より幅広い教員層がタスクフォースに応募するようになった。また、研修の最後に新入生からの自由な質問を幅広く受け、対応する層の教員がこれに回答するコーナーを設けることにした。これらにより新入生は幅広い将来の選択肢の具体像に触れながら、自らの将来を思い描くことができるようになることを期待している。</p>	
今後の計画	
<p>2018 年度のスタートアップ研修での新入生と参加教員からのフィードバックを得てさらなる改善を図る。</p>	
改善状況を示す根拠資料	
資料 4-1 スタートアップ研修学生指導教員依頼	

項番・題目	4.4 学生の教育への参画
水準・判定	基本的水準 適合
改善のための助言	
なし	
改善状況	
<p>学生からの生活・教育施設改善のための要望が、学生会と教学委員会との懇談会だけでなく各種委員会に出席する学生代表からもだされるようになり、その要望に沿った対応が検討されるようになった。</p>	

<p>たとえば、長期にわたって学外実習に出る学生についての特例的な図書貸出期間の延長措置の要望が学術情報センター運営委員会の学生代表委員から提示され、学術情報センター運営委員会及び図書館委員会で検討して要望通りの貸出期間の特例的延長措置を講ずるとした。</p> <p>図書館の開館時間の夜間を含めた延長の要望が学生会と教学委員との懇談会で学生側から提出され、学術情報センター運営委員会および図書委員会で試験期間中の開館時間延長試行を検討している。</p>
今後の計画
<p>学生が参画できる学生生活・教育施設改善に関わる各種委員会を増やす努力を続ける。</p>
<p>改善状況を示す根拠資料</p> <p>資料 4-2 カリキュラム自己点検・評価委員会 委員名簿</p> <p>資料 4-3 平成 29 年度下半期 2・3・4 年生合同アンケート集計結果</p> <p>資料 4-4 図書館の開館時間延長について</p>

5. 教員

項番・題目	5.1 募集と選抜方針
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善のための示唆	
<p>女性医師が大学の指導的立場の教員として、より多く登用されることが望まれる。</p>	
改善状況	
<p>平成 25 年度以降、本学有給教員の中での女性比率は年々増加しており、平成 29 年度の本学（西新橋校・国領校）の有給教員数は、男性 933 名、女性 271 名と男女比率はそれぞれ 77.5%、22.5%であった。その内教授数の男女比率は 92.6%、7.4%、准教授数は 89.9%、10.1%であり、指導的立場の教員の女性比率が上昇している。助教（有給レジデントを含む）についても男女比は、70.6%、29.4%と女性比率が平成 25 年度と比較して 10%以上向上した（資料 5-1）。平成 29 年度の新規採用者（レジデント）については、医学科 1 年生における男女比とほぼ同じであった。（資料 5-2）。</p>	
今後の計画	
<p>継続して、男女比率を確認していく。</p>	
改善状況を示す根拠資料	
<p>資料 5-1 医学科教員の男女比の推移</p> <p>資料 5-2 医学科 1 年生と新規採用者（レジデント）の男女比</p>	

項番・題目	5.2 教員の活動と能力開発に関する方針
-------	----------------------

水準・判定	基本的水準 適合
改善のための助言	
エフォート率に関し、大学は一定の基準を明示した上で、達成度を計る姿勢が望まれる。	
改善状況	
<p>評価当時の状況としては、各教員に対する教育支援として、学習理論、評価論、特にアウトカム基盤型カリキュラムについての知識伝達を図っていくために毎年数回、FDが開催されていた。その他、カリキュラム特別検討会、カリキュラム編成会議、医学教育セミナーへの参加は自由であり、教育に関する新しい知見を共有する機会を提供していた。研修プログラムとしては、医療安全・感染セミナー、医学論文の書き方講習会、CPC、ICLS・BLS講習会、鏡視下手術トレーニングなどが全学的に行われていた。これらの教育支援のうちFDについては、開催回数も少ないため教員全体の受講率は低く留まっていた。</p> <p>評価後の改善状況は、平成28年9月より、FDの教員参加100%を目指してFDの構成、開催件数を拡充した。学外の授業担当教員も対象者として、FDを新たに学事課FD、医療安全FD、臨床実習FDの3つに大別し、開催回数を大幅に増加させたほか、忙しい臨床医のために各医局会でのDVD視聴形式のFD開催など各教員に個別に対応した教育支援を行った。</p>	
今後の計画	
FDの実施、受講状況を継続して確認する。	
改善状況を示す根拠資料	
資料5-3 FD開催状況	

6. 教育資源

項番・題目	6.1 施設・設備
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善のための示唆	
西新橋キャンパスにおいて、学生用食堂などスペース・設備の拡充が望まれる。	
改善状況	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 大学管理棟3階に演習室を整備し、学生が利用出来るようにした。 ○ 図書館の利用規則を改定して、館内での飲水を可能にした。 	
今後の計画	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 愛宕マークビル1階・学生用学習スペース ○ ロッカールーム、休憩所の改善（解剖棟） ○ 新外来棟内に設置される食堂の学生利用に関する検討 	

改善状況を示す根拠資料 資料 6-1 平成 29 年度第 4 回学術情報センター運営委員会記録
--

項番・題目	6.2 臨床トレーニングの資源
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善のための示唆	
なし	
現在の状況	
<p>平成 29 年 9 月からの診療参加型臨床実習において、選択科は国内外の施設から学生個人のニーズに合わせて選択できるものですが、介護・福祉システムに精通した医師を育てることは我が大学においても重要な責務と考える。しかし学生が地域医療実習を希望しても、個人的に実習先を探すことは困難である。そこで、より深く地域医療を学びたい学生に対してその機会を提供すべく、地域医療実習を診療参加型臨床実習（選択）のカリキュラムとして設定した。</p> <p>地域医療実習先</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 光風園病院：山口県下関市 ② 隠岐島前病院：島根県隠岐郡西ノ島町 ③ 湯沢保健医療センター：新潟県湯沢町 	
今後の計画	
地域医療実習先の充実	
現在の状況を示す根拠資料	
資料6-2 診療参加型臨床実習（選択）における地域医療実習について	

項番・題目	6.3 情報通信技術
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善のための示唆	
なし	
改善状況	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 管理棟 3 階の演習室に WiFi を敷設し、学生が利用できるようにした。 ○ 平成 30 年 1 月より本院に電子カルテが導入され、電子カルテ端末に学生カルテシステムをインストールして、学生が受け持ち症例の情報を閲覧しながらカルテ記載トレーニングを行う環境を整備した。 	
今後の計画	
○ 学生カルテシステムの改良	

改善状況を示す根拠資料
資料 6-3 管理棟 3 階 WiFi 敷設について (お願い)
資料 6-4 学生カルテシステムマニュアル

項番・題目	6.6 教育の交流
水準・判定	基本的水準 適合
改善のための示唆	
履修単位の互換は行われていない。	
改善状況	
履修単位の互換が行われていないことへの指摘があったが、2017 年度は履修単位の互換を行わなかった。	
今後の計画	
○ 本学は上智大学、東京理科大学と包括的・大学間協定を締結しているため、これらの大学で夜間や土曜に開講されている科目を履修できるかどうか、学生のニーズを見極めながら、カリキュラム委員会及び教学委員会で検討する。	
改善状況を示す根拠資料	
なし	

項番・題目	6.6 教育の交流
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善のための示唆	
なし	
改善状況	
○ 国際交流を一層促進するために、2015 年に国際交流センターが発足したが、施設が存在していなかった。2017 年度に管理棟 1 階の改修工事を行い、国際交流センターを開設した。この施設には、海外から訪れた学生と本学の学生との交流を推進するためのコミュニティスペースも設けられており、毎週月曜の昼食時間に International Cafe を開催して学生間の交流を図っている。	
○ シンガポール国立大学と協定を締結し、海外協定校を 10 校に増加した。	
○ 外国人模擬患者による英語医療面接演習を正式なカリキュラムとして、選択科目に認定し、海外で臨床実習を行う学生が受講できるようにした。	
○ 2017 年度に海外に派遣した学生数は、延べ 18 人であった。	
○ 2017 年度に海外の大学から受け入れた臨床実習学生数は延べ 126 人で過去最高数であった。	
○ 学生の国際交流を促進する目的で 2015 年から継続されている、海外留学支援	

セミナー、USMLE 対策セミナー、TOEFL/IELTS 対策 セミナーを実施した。
今後の計画
○ 国際交流センター専任職員および教員の増員を計画する。 ○ 海外協定校の拡充を計画する。
改善状況を示す根拠資料
資料6-5 海外協定校 資料6-6 海外臨床選択実習学生数、受入数、International Café実績 資料6-7 海外留学支援セミナー 資料6-8 USMLE対策セミナー 資料6-9 TOEFL/IELTS対策 セミナー

7. プログラム評価

項番・題目	7.1 プログラムのモニタと評価
水準・判定	基本的水準 適合
改善のための助言	なし
改善状況	<p>本学教学委員会の下部組織としてカリキュラム自己点検・評価委員会を2016年に再開したが、本年度からはカリキュラム委員会と同様に医学科学生もメンバーとして参加させるようにした。2015年8月に教育IR部門の規程が整備され、「本学における教育プログラムの検証を行うための統括的かつ経年的な調査、データの収集と管理、解析に基づく提言を実施する部門」ということが明確になった。2016年からはIR部門専任の職員も配置され、教学に関する基本的なデータを収集し、データを基にカリキュラムを評価して改善に結びつけていく作業を本格的に開始した。2016年度からの新体制のカリキュラム委員会では、コース責任者を全て委員とし、カリキュラムの構築と実施に各コースからの視点が入り入れられるようにした。カリキュラム委員会では、従前の医学科達成指針を基盤として新たに卒業時コンピテンス（案）を作成した。この卒業時コンピテンス（案）は、医学科達成指針やクリニカルクラクシップのコンピテンシーと連動した内容となっている。また、2016年にカリキュラム委員会の下部組織として「マイルストーンWG」が結成され、新たに設定された卒業時コンピテンス（案）を達成する指針となるマイルストーンの作成作業を担当した。この「マイルストーンWG」の構成メンバーには臨床医学系教員、基礎医学系教員、教養系（人文・自然科学）教員を幅広く募り、医学科全学年におけるマイルストーンの策定を多角的に検討しながら行った。30回を超える検討会を開催し、2018年8月のカリキュラム編成会議に策定されたマイルストーン（案）を提示した。</p>

今後の計画
<p>2018年8月のカリキュラム編成会議で提示した卒業時コンピテンス（案）ならびにマイルストーン（案）について、全てのコース・ユニット責任者から各自の教育内容との関わりをアンケート形式で情報収集している。また、学生やボランティア市民（本学教育センターに設置されている「あけぼの会」のメンバー）の意見なども情報収集しており、それらも参考として今後さらにブラッシュアップを図る。</p> <p>今後は、この卒業時コンピテンス（案）ならびにマイルストーン（案）と全てのユニットの教育内容を照合しながら、必要に応じてカリキュラムの見直しや追加などを考慮して行く予定である。</p>
<p>改善状況を示す根拠資料</p> <p>資料 4-2 H29年度カリキュラム自己点検・評価委員会名簿(H30.3.14)</p> <p>資料 2-2 卒業時コンピテンス・マイルストーン（案）</p>

項番・題目	7.1 プログラムのモニタと評価
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善のための示唆	なし
改善状況	<p>医学教育モデル・コアカリキュラム導入状況については、平成28年3月に提示された改訂版モデル・コアカリキュラムを全てのユニット責任者が掌握し、各ユニットの教育内容に関連する項目をシラバスに記載するようにした。</p>
今後の計画	<p>医学教育モデル・コアカリキュラムにおける各ユニット関連の項目を包括的に分析し、網羅できていない項目などは今後のカリキュラムの改訂・追加を考慮する。カリキュラム自己点検・評価委員会とカリキュラム委員会がこの役割を担当して行く。</p>
改善状況を示す根拠資料	<p>資料 7-1 平成 30 年度シラバス記載内容</p>

項番・題目	7.3 学生と卒業生の実績・成績
水準・判定	基本的水準 適合
改善のための助言	なし
改善状況	
項番・題目	7.1 プログラムのモニタと評価でも述べたが、アウトカム基盤型教育

<p>の実現に向け、カリキュラム委員会において、従前の医学科達成指針を基盤として新たに卒業時コンピテンス（案）を作成した。この卒業時コンピテンス（案）は、医学科達成指針やクリニカルクラークシップのコンピテンシーと連動した内容となっている。また、2016年にカリキュラム委員会の下部組織として「マイルストーンWG」が結成され、新たに設定された卒業時コンピテンス（案）を達成する指針となるマイルストーン（案）の作成作業を行った。この「マイルストーンWG」の構成メンバーには臨床医学系教員、基礎医学系教員、教養系（人文・自然科学）教員を幅広く募り、医学科全学年におけるマイルストーンの策定を多角的に検討した。30回を超える検討会を開催し、2018年8月のカリキュラム編成会議に策定されたマイルストーン（案）を提示した。</p>
<p>今後の計画</p> <p>2018年8月のカリキュラム編成会議で提示した卒業時コンピテンスならびにマイルストーン（案）について、全てのコース・ユニット責任者から各自の教育内容との関わりをアンケート形式で情報収集している。また、学生やボランティア市民（本学教育センターに設置されている「あけぼの会」のメンバー）の意見なども情報収集しており、それらも参考として今後さらにブラッシュアップを図る。</p>
<p>改善状況を示す根拠資料</p> <p>資料2-2 卒業時コンピテンス・マイルストーン（案）</p>

8. 統轄および管理運営

項番・題目	8.4 事務職と運営
水準・判定	質的向上のための水準 適合
改善のための示唆	なし
改善状況	<p>2015年8月に教育IR部門の規程が制定され（資料101）、教学に関するデータの収集、分析をする権限が明らかになった。学生の学習過程と学習成果をモニタリングするために、基本情報の経年的蓄積を開始した。</p>
今後の計画	<p>基本情報の経年的蓄積をさらに進める。</p>
改善状況を示す根拠資料	<p>資料9-1 教育IR部門規程</p>

9. 継続的改良

項番・題目	9. 継続的改良
水準・判定	基本的水準 適合
改善のための助言	
なし	
改善状況	
2015年8月に教育IR部門の規程が制定され、教学に関するデータ収集、分析、提言をする権限が明らかになった。学生の学習過程と学習成果をモニタリングしてその成果を可視化するために、基本情報の経年的蓄積、データの編集と解析を開始した。	
今後の計画	
基本情報の経年的蓄積、データの編集と解析をさらに進める。	
改善状況を示す根拠資料	

項番・題目	9. 継続的改良
水準・判定	質的向上のための水準 評価を実施せず
改善のための示唆	
なし	
改善状況	
<p>① 2015年8月に教育IR部門の規程が整備され、「本学における教育プログラムの検証を行うための統括的かつ経年的な調査、データの収集と管理、解析に基づく提言を実施する部門」ということが明確になった。2016年からはIR部門専任の職員も配置され、基本的なデータを経年的に収集し、データを基にカリキュラムを評価して改善に結びつけていく作業を本格的に開始した。卒業時アンケート、卒業生アンケートなどのアンケートを実施し、本学の教育プログラムについての意見を集積し、データ化している。</p> <p>② 各学生情報を学籍番号で統括的に管理して経年的なデータ蓄積をすることが可能になったことにより、学生の入学時から卒業までの実績、さらには卒後の実績についても追跡することが可能になった。今後は本学で学んだ学生について、知識や技能の獲得のみならず、認識や態度の変化についても評価して、本学が使命を果たしていくための教育のあり方について検証していく。</p> <p>③ 今後は、レポートなどの形で定期的に教育プログラムについての分析結果を公表し、教学委員会やカリキュラム委員会に教育改善への視点を提言できる活動へと発展させていく。</p>	
今後の計画	

①、②、③について、さらに充実を図る。
改善状況を示す根拠資料 なし

以上